

二〇二四年度入学者選抜試験問題

国語

(六〇分)

問題は□から■まで(20ページ)ある。

解答は、すべて別紙の解答欄に記入すること。

文字は正しくていねいに書くこと。

句読点も一字に数える。

— 1 —

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

最近、昔に比べ障害者スポーツへの注目度がかなり高まってきています。先日パラアスリートを養成する大学が出てきていることが新聞記事になっていました。いまは誰もがオリンピックの後はパラリンピックがカイトサイ^①されることを知っています。一九六〇年代、私が小学生の頃、少なくともテレビでパラリンピックの報道はなかったと記憶しています。

では最近なぜ注目されるのでしょうか。やはり日本人選手の活躍が最大の原因でしょう。でもマスコミの報道などを見て、私は、最近このスポーツへの注目の質が変わってきているのではと思っています。

一枚のスキー板に乗り、急な斜面を猛スピードで滑走するスキー選手。上半身の筋力をフルに使い、シツソウ^②する車いすマラソン。見事に車いすを操りながら、相手が返せないところへボールを打つ車いすテニスの選手。車いすごと激しくぶつかりボールを奪いあう格闘技のような車いすバスケット、等々。テレビなどを通して、障害者がスポーツする姿が流されるようになり、彼らが熱中している姿や本気度、競技そしてスポーツとしての洗練度に私たちは、改めて驚き、感動しているのではないのでしょうか。

なぜ驚き、感動するのでしょうか。

多様な障害があるにもかかわらず、それを克服し、自らの肉体や精神を磨きあげ、スポーツのルールを遵守し、そのなかでより高みへと向かう障害ある人々の規律ある姿にひととしての美しさを感じ取り、私たちは感動しているのでしょうか。こうした感動が、通常のスポーツアスリートの姿への感動とまったく同じ情緒に由来しているのか、そうでないかを検討することは、障害者の問題を考えるうえで、とても重要だと思えます。ただ、ここでは、ちよつと別の視角から障害者スポーツのことを考えてみることにします。

先ほど注目の質が変わってきているように思えると言いました。それはマスコミの報道などを見ていて、¹障害者スポーツに対する固定した見方が崩れつつあるという感覚と言ってもいいかもしれません。

たとえば、車いすバスケットの試合を見ていて、私はこう思います。確かに足や下半身に障害がある選手が車いすを見事に操ってバスケットボールの試合をしている。しかし、この競技は障害ある人々だけが参加することができるスポーツなのだろうか。下半身に障害のない人でも、何らかの形で下半身を固定し、車いすに乗ることができれば、車いすバスケットという競技をすることができるだろうと。

またブラインドサッカーの試合を見ていて、私は同じことを思うのです。この競技は視覚障害の人だけに開かれたスポーツなのだろうか。障害のない人の目を見えない状態にして、ブラインドサッカーができるのではないだろうか。

そしてこうした思いの先にある問いが、以下のようなものです。

A 障害者スポーツは障害のある人のためだけのスポーツなのだろうか。身体のだの部位に障害があるか、またその程度などで分けして行われる水泳などの競技は、やはり障害ある人のためだけの競技だと言えるでしょう。

B 私たちがひ

とくくりにする障害者スポーツは、障害ある人だけのためにという意味ではなく、競技方法の工夫などに由来する違いや個性がさまざまにあります。それゆえ、車いすバスケットは、主に障害ある人々が行う競技であるとしても、障害者バスケットではなく、「車いす」バスケットと私たちは呼んでいますし、ブラインドサッカーも、視覚障害者サッカーではなく、ブラインド、**C** 目が見えない状態で行うサッカーと、私たちは呼んでいるのです。

² こうした見方は、障害者スポーツをめぐる私たちが持っている「あたりまえ」の知を確実に揺るがすのではないのでしょうか。たとえば私がブラインドサッカーをやるとして、目隠しし、視覚障害がある選手と対等に競技ができるでしょうか。できないでしょう。上手な選手の足手まといになるのがオチです。視覚が遮られたなかで、周囲の声や音を聞きわけ、状況を瞬時に判断し、次のプレーに移れる能力において、私は視覚障害のある選手からはるかに劣っているからです。

私が上手になるためには、ブラインドであることに慣れ、ブラインドであるからこそさらに研ぎ澄ませるべき力に気づき、それを鍛えていかなければならないでしょう。つまり、ブラインドサッカーという競技や競技の現実において、「見えること」をめぐる常識や価値はすべて、いったん無効になります。そして、私は「見えない」なかでどのようにプレーができるのかを

考えざるを得ないし、「見えないこと」をめぐる常識や価値と向きあわざるを得なくなるのです。

ルールが守られ、^③ゲンカクな規律が遵守される競技空間で、普段私たちが「あたりまえ」だと思いついでいる支配的な常識や価値が見事に転倒されるのです。そして^③こうした転倒が起こることこそ、障害者スポーツがもつもう一つの面白さであり、感動を生みだすもではないでしょうか。

もちろん、私がブラインドサッカーをして、少しばかり上手になったからと言って、視覚障害のある人々の気持ちやより深いところにある思いなどを完璧に了解できるなどとは思わないでしょう。でも障害をめぐるさまざまな決めつけや思いこみが息づいている支配的な常識や価値を「あたりまえ」だと思いついでいた私の日常に、確実に^④キレツが入るだろうし、私はそのことで障害という「ちがひ」それ自体とよりまっすぐに向きあえるようになるでしょう。そして、「ちがひ」が私の日常にとつて、どのような意味や意義をもつかを考えていくための想像力もより豊かになっていくだろうと思うのです。

さて私たちは「ちがひ」のある他者とうちの出会えるのでしょうか。私は以前、障害者を嫌がり、嫌い、恐れるということの背後になにかあるのかについて考え書いたことがあります(好井裕明「障害者を嫌がり、嫌い、恐れるということ」石川准・倉本智明編著『障害学の主張』明石書店、二〇〇二年、八九―一一七ページ)。これを書きながら、そこでまとめたかつての個人的体験を思い出していました。詳細は、私の論文を読んでもいただければと思いますが、それは私のドッキリ体験であり、障害という「ちがひ」になぜ私たちが普段から、まっすぐに向き合えないのかを考えることができる体験だったのです。

温泉につかって、^無になること。これは私の趣味というか、生きがいというか、これをしなくては私が枯れてしまうというとても大切な営みなのです。ちよつとぬるめの湯につかって完全に湯と一体化し、^無になるまでの時間、意識や思考はまだしつかりしているのですが、そのうちに身体は広い湯ぶねにくまなくとろけだし、ちよつど私の「頭」だけが湯にただよっている、そんな状態。このとき、私はえもいえない快感にひたります。そしておもしろいことに、この^無頭ただよい状態のとき、私の思考は研ぎ澄まされ、いろいろな発想がわいてきたり、ある問題への考えが一挙に進んだりするのです。

いつものようにスーパージョージ湯にでかけ、^無になると湯ぶねにつかり、とろけようと全身の緊張感をといて、ふと目をあ

けたところ、湯ぶねのふちに五、六歳くらいの子が立っていたのです。ああ、かわいい子やなあ」とまた目を閉じようとした瞬間、私の視線はその子に釘づけになっていました。彼の両腕は極端に短く、彼はその小さい手で顔をかきながら、そこに立っていました。私は、さまざまな構えをはずし無防備になり、いわば丸裸で無になるうとしていたのですが、瞬間、少年がすつと私のなかに入り込んできた、そんな感じがしました。不意をつかれ、ドキッとしたのです。つまり、私はいわばまったく無防備な状態で、両腕が極端に短い障害ある少年と出会ったのです。

私はなぜこんなにもドキッとしたのだろうかと考えながら、無にならずに、周囲を観察していました。みんな自然にふるまっていました。それは明らかに、つくられた、ぎこちない、自然さでした。裏を返せばとても不自然で、どこか緊張した戸惑い、とでもいえる空気がそこに満ちていて、ただ少年のみが、そしていっしょに来ていた若いおとうさんがごく自然に風呂を楽しんでいたのです。

考えるべきは、この不自然で、どこか緊張した戸惑いであり、私のなかに生じたドッキリなのです。それは障害ある人をロコツに排除する行為でもないし、障害ある人を嫌ったりする情緒でもありません。丸裸で無防備な私が、障害ある人を目の前にして、自分のふるまい方がわからずドギマギしている状態といえるかもしれません。また障害ある人と自分との距離をどのように適切に、とっていいのかわからない、そんな戸惑いかもしれません。

そんな細かいこと言ってしまうのは、普段よくある場面だろうし、深く考えないで無視しておけばいいではないか。そんな声が聞こえてきそうです。でも「無視する」こともまた、なかなか難しいのです。

「無視する」とは、ただ相手を見ないということではありません。それは、私が相手を見つめていないこと、関心がないことを相手や周囲にたいして、具体的なふるまいで適切に示さなければならぬ営みなのです。そして私の体験や銭湯での「空気」は、まさに障害という「ちがい」と「適切」に出会い、「ちがい」ある他者と「適切」にやりとりできている自然な日常ではなかったということなのです。

少しめんどくさく言ってみましょう。他者を理解するということは、心の次元の問題ではありません。シュツツやエスノメ

ソドロジーの考え方からすれば、それは、他者とのように日常的な関係をつくりあげることができるのか、そうした関係がどのように実践的で処方箋的な知識を用いてできあがっているのかを考える問題なのです。またそれは、私と他者が日常的な関係のなかでどのように相互的な信頼をつくりあげることができるのか、また距離を保つことができるのかなどを考える私と他者の相互行為の次元にある問題なのです。

私たちは、普段他者と出会う時、その人を瞬時のうちに理解し、どのようにふるまえばいいかを判断しています。そうした判断の背後には他者を理解するために必要な幅広く深い知識の在庫があり、この在庫から、その時その時に、適切だと思ふ知識を引き出して、他者と向き合っているのです。

とすれば、「ちがひ」ある他者とのように向き合えばいいのでしょうか。まず言えることは、「ちがひ」をめぐる知識の在庫をできるだけ豊かにすることでしょう。薄っぺらな知だけでは、適切に向きあうことができません。従って障害という「ちがひ」に由来する豊かさに触れることはできないだろうし、その豊かさを感じ取る想像力さえも私の中に、育つてくることがないからです。

また言えることは、すでにある在庫の知識を常に疑ってかかることの大切さです。たとえばブラインドサッカーに実際に参加すれば、視覚障害という「ちがひ」をめぐる私たちの知識在庫は確実に質量ともに豊かになるはずですが、その結果、「ちがひ」のある他者との出会い方や向きあい方も幅広く豊かに洗練されたものになるでしょう。

私たちの日常的な知識は、常に支配的な価値や支配的なものの見方の影響下にあるものです。そしてたいていの場合、支配的な価値やものの見方に従って暮らした方が楽であり効率がいいとは思いますが、ただ、「ちがひ」のある他者と出会うとき、こうした楽しさや効率性は、いったんカッコに入れておいた方がいいでしょう。むしろ支配的な価値が障害という「ちがひ」がもつさまざまな新たな意味や創造の可能性を私を感じ取るうえで、まさに「邪魔な障害」となるからです。

そして、一番大事なと思うのは、「ちがひ」がある他者との出会いで、生じるであろう新たな世界への入り口を見失わないように、私自身が他者を理解するためのセンス、いわば他者への想像力を常に磨いておくことであり、想像力を豊かにして

いく楽しさを味わうことだと思います。

「ちがいが」がある他者を差別し排除すること。それは、他者への想像力が劣化した結果生じるのであり、それは他者に深い傷や苦しみを与えるでしょう。でも同時に、それは私自身をも深く傷つけ、ひととしての厚みや豊かさを確実に私から奪っていくのです。

⁶ 私が豊かに生きることができかどうか。それはまさに私が、「ちがいが」がある他者とどう出会おうとするのかにかかっているのです。

(好井裕明『今、ここ』から考える社会学』による)

問一 〓線部①～⑤のカタカナを漢字に改めよ。

問二 〓線部1「障害者スポーツに対する固定した見方」とあるが、どのような見方だったのか。簡潔に答えよ。

問三 空欄 A C に入るのに、最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えよ。
ア しかし イ だから
ウ つまり エ はたして

問四 〓線部2「こうした見方」とあるが、それはどのような見方か。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 競技方法の工夫によって、障害者が有利に競技できるスポーツという見方。
イ 障害のある人がその個性で優位に立つことができるスポーツという見方。
ウ 競技方法の工夫に由来した違いを共有して、皆で行うスポーツという見方。

エ 障害のある人だけのために、区分けやルールが工夫されたスポーツという見方。

問五 〓線部3「こうした転倒が起こることこそ、障害者スポーツがもつもう一つの面白さであり、感動を生みだすものではないでしょうか」とあるが、「こうした転倒」が「感動を生みだす」のはなぜか。本文中の語句を用いて説明せよ。

問六 〓線部4「ドギマギしている状態」とはどのようなものか。説明せよ。

問七 〓線部5「無視すること」も難しいのはなぜか。本文中の語句を用いて説明せよ。

問八 〓線部6「私が豊かに生きる」ためには、何が必要だと筆者は述べているか。三点あげて説明せよ。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

中学生の広海は地元の高級ホテルでアルバイトをしつつ、この島を出たがっている。広海と同学年である真帆は一家で島に移住してきている。次の場面はこの二人が、ホテルの宿泊客である松平が路上でうずくまっていたところと遭遇し、ホテルに送っていかうとする場面である。松平は島の出身者で、都会で事業に成功し、半世紀ぶりに帰島していた。

茜色^{あかね}に染まりはじめた道を、三人で歩く。からすの群れがかしましい鳴き声とともに、夕焼け空を横切っていく。

真帆と松平が横に並び、広海は一步遅れて自転車を押しながらついていく。自転車の後ろに乗ったらいいと真帆が何度すすめても、松平は頑として断った。よっぽど年寄り扱いされたくないらしい。実際に年寄りなんだから認めるよ、と広海はあきれたが、脚は丈夫だから平気だと言いきっただけあって、足どりはしっかりしている。

「どうですか、ホテルは？」

どうせ盛りあがるはずもないのに、真帆は果敢に会話を試みている。

「どうもこうも。どこもかしこも気どつて、落ち着かない」

松平がつけつけと応じた。

「すごく人気があるんですよ」

真帆が心外そうに言い返す。

「有名な芸術家の作品がいっぱい展示してあるし、建物を設計した建築家も人気があるし。世界中からお客さんが集まってくるんですよ」

「世界中、ねえ」

松平が小ばかにしたように薄く笑った。真帆から教わるまでもなく、ホテルの概要は承知しているのだろう。しかし、とそ

ここで広海は先ほどの疑問に再びつきあたる。松平は他の観光客たちと同じように、美術館や眺望を楽しむために来たとも思えない。なにかしら他の理由があるはずだ。

「有名だっていったって、ありがたがるほどのものなんだか。よくこんな、世界の果てみたいな島まではる来ようって気になるね。時間を使って、大枚はたいて」

意地の悪い口調は別として、松平の言い分は広海が日頃からややもやと考えめぐらせていることをほぼ代弁していた。¹でも、まったく賛成する気になれない。

「それだけの値打ちがあるんでしよう」

広海が言うと、松平はぱっと振り向いた。まるで広海が存在にはじめて気づいたかのように、しげしげと顔をのぞきこんでくる。

「値打ち？」

松平がゆっくりと繰り返した。声はさつきほどとがっていないけれど、からかうような試すような響きを聞きとって、広海の体はこわばった。

「あんたはそう思うんだ？ あそこで荷物を運んでやってるお客はみんな、値打ちがわかって来てるって思うんだね？」

口もとがゆがんでいる。笑っているのだと広海が気づくのに、少しかかった。

松平が自分を覚えていたらしいことにも、驚いた。到着してロビーへ入ってきたときに一瞬すれ違っただけなのに、どうして覚えられているのだろう。ひょっとして主任が言っていたように、無愛想すぎて目立っていたのか。それはまずい。かなりまずい。

「美術館だかなんだか知らないけど、ホテルなんて基本的に安心して眠れればそれでいいと思うけどね」

なにもかも見透かされている気がして、広海はますますたじろぐ。

り松平は魔女なのか。他人の心が読めるのか。

I
ぶるな、と暗に戒められた感もある。やっぱ

「まあ、お客はしかたないか。そうやってあおってるほうが問題だね。いりもしないものをごてごてくつつけて、あんなとんでもない値段をふっかけて」

言いたいことだけ言い終えると、言葉に詰まっている広海には目もくれず、松平は前に向き直ってすたすたと歩きはじめた。動揺しながらも、いやでも矛盾してるだろう、と広海はかろうじて胸の中で反論する。あざといと自らこきおろしているそのホテルで、松平は最高級のスイートルームにひとり泊まり、シャンパンを注文している。文句があるなら、三つもベッドルームがあるオーシャンビューの部屋なんかではなくて、そのへんの民宿に泊まればいい。いつそ親戚の家を訪ねてもいい。指摘してやりたいところだが、下手にはむかってまたやりこめられそうな気がして、とりあえず黙って後を追いかける。

「お客さんが満足してるんだから、いいじゃないですか？ 何度も繰り返し来てくれるひとも多いみたいだし」

言い返したのは、真帆だった。² 右半分だけ見える横顔の、頬が紅潮しているのは夕日のせいだけではないだろう。

好みというのは遺伝するのか、それとも育てかたのせいなのか、むこうみずとも言える勢いでここへ移住してしまった両親の娘だけあって、真帆は本当に島のが好きなのだった。

「それに、島に活気が出たのはホテルのおかげだってみんな言ってます。わたしたち、感謝してるんです。たくさんひとに、ここがこんないいところだって知ってもらえたんだから」

ただし今回は相手が悪い。松平にとってこの島が「いいところ」だったとは思えない。もう帰ろう、と広海は念じる。こんなやつと話してもいやな気持ちになるだけだ。別につきあう義理もない。

足をとめたのは、しかし真帆ではなく松平だった。腕を組み、真帆をじっと見据えている。どんなに辛辣な返答をよこすのか、広海ははらはらして見守った。

「ちょっと疲れた。休みたい」

松平が一方的に宣言した。

ちょうど通り過ぎようとしていたバス停のベンチに近づいて、ぺたりと腰を下ろす。むきになりかけていた真帆も毒気を抜

かれたようで、おとなしく隣に座った。

「じゃあ、少しだけ」

つくづく自分勝手なばあさんだ。広海は舌打ちをこらえ、自転車を停めた。年寄りのくせに、意地になって歩くからだ。このまま走り去ってしまえば爽快だろうが、真帆の自転車でそんなことはできない。そもそも真帆を置き去りにはできない。

「そうかもしれない」

松平がぼつりとつぶやいた。

それがさっきの話の続きだとは、広海も真帆もとっさにわからなかった。顔を見あわせているふたりにはおかまいなしに、松平はひとりごとのように続ける。

「感謝したほうがいい。運がよかったんだ。他にも島なんかいくらでもあるのに」

ホテルは、とある大企業からの出資を受けて建てられた。瀬戸内海に浮かぶ小島は無数にあるのに、なぜ他でもないこの島に白羽の矢が立ったのか、広海は正確なところを知らない。なにか明確な理由があったなら、主任あたりが嬉々として教えてくれそうなものだから、松平の言うとおり、単に運がよかっただけなのかもしれない。

「あれは別に島が作ったものじゃない。ただ、外からきたものをまるごと受け入れただけで」

松平の声はぞつとするほど冷やかだった。

ホテルやそこを訪れる人々をあれこれと批判しながらも、松平が本当に敵視しているものがなんなのか、広海はようやくはつきりと理解する。要するに松平は、見下しているのだ。この島と、ここで暮らしている人々を。

「わたしは、そうなりたくなかった」

口調をがらりとあらためて、松平が言う。これまで聞いた中では一番の、言い換えればはじめてともいい、明るい声音だった。

「絶対にそうなりたくなかった」

広海と真帆を交互に見る。楽しげともいえる微笑^{ほほえ}みを浮かべている。

「運とか好意とか、そういう不確かなものにばかり頼ってないで、自分だけでうまくやりたかった」

広海は松平から目をそらした。夕日に照らされたホテルが、視界の隅で輝いている。

「他人の力を借りて、自分で成功した気になって、調子に乗るなんてみっともない。それなら失敗したほうがまだいい」

「なんだよそれ、と思う。なんなんだよ。危うく口にも出しそうになって、それは思いとどまった。なにを言っても、松平は気を悪くするところか、笑みを深めそうな気がする。それにしても、どうしてこんなにいらいらするのか、自分でもわからない。広い外の世界に出て誰の力も借りずに勝負したいというのは、まさに広海の願いでもあるのに。」

「ホテルを経営してるんでしたっけ？」

真帆が我に返ったように聞いた。松平の声が表面上は穏やかなせい、言葉遣いが抽象的で真意が伝わりづらかったのか、さっきのように腹を立てている様子はない。

「経営していた」

松平が浅くうなずいた。

先月、社長の座を後任に譲ってから、ひたすら時間が余るようになったという。たいくつそうな元社長を見かねた部下たちに、せっかくだからのんびり旅行でもしてきたらどうかとすすめられ、その気になった。ひとりだから身軽なものだ。海外にしようか国内にしようかと思案しているうちに、故郷の島のことをふっと思い出した。

「もう何十年も、完全に忘れてたのにね」

A
肩をすくめる。

「ひまつぶしにはちょうどいいかと思って、来ることにした」

「どうですか、帰ってきてみた感想は？」

真帆が足をぶらぶら前後に揺らしてたずねた。好意的な反応が期待できないのは明らかなのに、勇気があるというかこりな

いというか、広海はもはや感心してしまう。

現実には、ドラマのようにはいかないのだ。これがドラマなら、ひねくれた老女は心優しい島の少年少女に感銘を受け、ひさびさになつかしいふるさとを訪れた喜びを素直に独白する。そして、少年たちに感謝しつつ、ほろ苦くもあたたかな郷愁を胸に、すがすがしい気分で帰っていく。あるいはもつとわかりやすく、島に戻って余生を過ごそうと決意する、というのはいやりにすぎだろうか。

「別に、なにも」

案の定、松平は鼻を鳴らした。

「なにも？」

不服そうな声を上げた真帆に、すましてうなずいている。ホテルにチェックインしたときの苦しげな表情とはうってかわって、泰然と落ち着きはらっている。

「じゃあ、なんで」

広海は思わずさえぎった。目の前にいる松平ではなく、ロビーをつかつかと横切っていくはりねずみみたいに神経をとがらせた老女を、頭の中に再生する。

「なんで、ぴりぴりしてるんですか？」

松平の口もとがこわばった。手ごたえを感じ、広海はさらにたたみかけた。

「結局はこだわってるんじゃないですか」

⁴ まるでお面を脱ぐように、松平の顔から柔和な表情が消えた。にらみつけてくる視線も、もうおそろしくはなかった。どちらかといえば快い。

「子どもが、えらそうに」

松平が吐き出すように言って、ぶいとそっぽを向いた。勝った、と広海は思った。晴れやかな気分で見下ろす。白い

髪がべたんと頭にはりつき、骨ばった首筋にしみが浮いている。びくつくことなんかなかった。ただの老人だ。魔法なんて使えない。

確かめるように、自分に言い聞かせるように考えた。しかし考えれば考えるほど、⁵ どういうわけか、ふくらんだ気持ちはずるするとしぼんだ。はつが悪くなってきた、広海は顔をそむけた。いつのまにか、空を染めていたピンク色は水で薄めたように淡くぼやけていた。天頂に細かい星が散らばっている。

つられたように頭上をあおいだ真帆が、立ちあがった。

「やばいよ。日が沈んじゃう」

広海は自転車のブレーキをはずした。動こうとしない松平に向かって、真帆が優しく声をかける。

「そろそろ行きましょう」

松平はベンチに座ったまま、小さな声で答えた。

「足が痛い」

自転車のふたり乗りは、落っこちそうでこわいと言われてあきらめた。かわりに松平をサドルにまたがらせ、広海と真帆で前後を支えて進めようとしたら、足があたって痛むという。真帆は眉を下げ、再びベンチに座りこんでしまった松平をしばらく眺めてから、傍らにほんやりとつたっていた広海に目を移した。

じっと見つめられて、広海はしぶしぶ降参した。自転車を真帆に預け、松平に背を向けてしゃがむ。

松平は見た目よりもさらに軽かった。心細くなるくらいだった。

「大丈夫ですか？」

自転車を押して横を歩きながら、真帆が聞く。

「自転車よりは若干ましだね」

松平がかすれ声で答えた。生あたたかい息が広海の耳にかかる。くすぐったくて身をよじると、

「痛い」

すかさず文句を言われた。

「揺れると響く。もつと静かに歩いてもらわないと」

真帆が免じてせつかく親切にしてやっているのに、調子に乗られても困る。広海はわざと体を揺すってみる。

「痛い！」

松平がわめく。耳がびりびりする。広海はしかたなく歩調をゆるめた。首にしがみつかれたら息ができない。

「もう少しですから」

真帆がとりなすように声をかけた。松平が首を伸ばしたのが、背中越しに伝わってくる。行く手をうかがっているのだろう。

「本当に暗いね」

ほそりと言う。

「なつかしいでしょう？」

「まさか。こつちのことはもうなんにも覚えてないね」

松平はためらいなく即答し、皮肉っぽく言い添えた。

「慣れてないと、逆に新鮮だよ」

外の世界に出たら、この島で暮らした日々の記憶は薄れていくのだろうか。これまで考えたこともなかったことを、広海はふと考える。松平みたいに五十年間まったく思い出さないといいのは極端にしても、刺激にあふれた魅力的な新しい生活のことで頭の中はいっぱいになって、置き捨てた過去は隅に追いやられ色あせていくのか。古ぼけたセピア色の残像も、やがてすっかり消えてしまうのか。

6

はっとして、足をとめる。

「どうした？ ばてたか？」

松平が相変わらずえらそうな口調でたずねた。

「図体は大きいわりに、体力がないんだね」

憎まれ口を聞き流して、広海は歩きはじめた。ふつつと腹の底のほうから笑いがわいてくる。

もう何十年も完全に忘れていたのに、不意に島のことを思い出したと松平は言った。時間を持って余し、ひまつぶしに来てみようと思ったのだと説明していた。さも、こんな島にはなんの興味もないと言わんばかりだった。ここで暮らしていた過去など、取るに足りない、どうでもいいことだったのだと。

でも本当に、記憶はそんなに都合よく消えたりよみがえったりするものだろうか。仮にそうだったとしても、いくらたいくつしているとはいえ、なんの思い出も残っていない場所をはるばる訪ねてみようという気になるだろうか。もしも興味がないのなら、どうして快適なホテルにこもらずに、暑い中こんなところをうろろしていたのか。なんにもない土地だ。少なくとも、ここに特別な思い入れのない、よその人間にとっては。

こわばっていた松平の体から、少しずつ力が抜けていく。まっすぐに延びた道の先に、町のあかりが見えてきた。

（瀧羽麻子『サンティアゴの東 渋谷の西』所収「瀬戸内海の魔女」による）

問一 — 線部1「でも、まったく賛成する気になれない」とあるが、広海は松平と同じ考えだと思ったのに、まったく賛成する気になれなかったのはなぜか。説明せよ。

問二 空欄 **I** に入れるのに最も適切なものを次の

中から選び、記号で答えよ。

- ア 金持ち イ 専門家
ウ 優等生 エ 島の住民

問三 — 線部2「右半分だけ見える横顔の、頬が紅潮しているのは夕日のせいだけではないだろう」とあるが、これは真帆のどのような感情を表したのか。その理由とともに説明せよ。

問四 — 線部3「これまで聞いた中では一番の、言い換えればはじめてともいっていい、明るい声音だった」とあるが、松平が「明るい声音」で言ったのはどういう思いの表れか。説明せよ。

問五 ……線部A、Bの語句は文中でそれぞれどのような感情の表現か。最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えよ。

A 肩をすくめる

ア 不満や怒り イ 驚きや意外さ

ウ 悲しみや落胆 エ 困惑や恥ずかしさ

B ばつが悪くなって

ア きまり悪くなり、恥ずかしくなって

イ 自信がなくなってきた、怖くなって

ウ 批判されているようで、悲しくなって

エ 相手にされていないようで、いらいらして

問六 — 線部4「まるでお面を脱ぐように、松平の顔から柔らかな表情が消えた」とあるが、松平の様子に変化が表れたのはなぜか。説明せよ。

問七 — 線部5「考えれば考えるほど、どういうわけか、

ふくらんだ気持ちはするするとしぼんだ」とあるが、広海は自分の発言で松平に「勝った」と思ったのに、その気持ちが「しぼんだ」のはなぜか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 松平に言ったことは、自分自身が悩んでいることにも当てはまるのですっきりしなかったから。

イ 松平に言ったことは、傷つけるためだけに口走ったことだと自覚し、自分の軽率さを後悔したから。

ウ 松平に言ったことは、思った以上に相手にシヨックを与えたように申し訳ない気持ちになったから。

エ 松平に言ったことばで、相手に勝ったと思った自分の浅はかさに気づき、その場をごまかしたいと思ったから。

問八 — 線部6「はっとして、足をとめる」と、— 線

部7「ふつふつと腹の底のほうから笑いがわいてくる」の二つの表現から、広海が松平の島への思いや自分自身のもやもやに対してどういうことに気づいたことが分かるか。説明せよ。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ある所に偷盗入りたりけり。あるじ起きあひて、帰らん所をうちとどめんとて、その道待ちまうけて、障子の破れよりのぞきをりけるに、盗人、物ども少々取りて袋に入れて、ことごとくも取らず、少々を取りて帰らんとするが、下げ棚の上に鉢に灰を入れて置きたりけるを、この盗人なにか思ひたりけん、つかみ食ひて後、袋にとり入れたる物をば、元のごとくに置きて帰りけり。

待ちまうけたる事なれば、伏せてからめてけり。この盗人の振舞ひ心得がたくて、その子細を尋ねければ、盗人いふやう、「我もとより盗みの心なし。この一兩日食物たえて、術なくひだるく候ふままに、初めてかかる心つきて、参り侍りつるなり。しかあるを御棚に麦の粉やらんとおぼしき物の手にさはり候ひつるを、物の欲しく候ふままにつかみ食ひて候ひつるが、はじめはあまり飢ゑたる口にて、何の物とも思ひ分かれず。あまたたびになりて、はじめて灰にて候ひけりと知られて、その後は食はずなりぬ。食物ならぬ物を食べては候へども、これを腹に食ひ入れて候へば、物の欲しさがやみて候ふなり。これを思ふに、この飢ゑに耐へずしてこそかかるあらぬさまの心もつきて候へば、灰を食べてもやすく治り候ひけりと思ひ候へば、取る所のものを元のごとくに置きて候ふなり」といふに、あはれにも不思議にも覚えて、かたのごとくのさうもちなどらせて帰しやりにけり。「のちのちにもさ程にせんつきん時は、はばからず来たりて言へ」とて、つねにとぶらひけり。盗人もこの心あはれなり。家あるじのあはれみ、また優なり。

(『古今著聞集』による)

【注】 *偷盗(ちゅうとう) 盗人。 *うちとどめん うち殺そう。 *伏せてからめてけり 組み伏せて縛り上げた。

*術(ずち) なくひだるく候ふままに どうしようもなくひもじくおりますまに。

*かたのごとくのさうもち 盗人が手を付けた、わずかな品。 *せんつきん時 どうにもならない時。

問一 ——線部1「この盗人の振舞ひ心得がたくて」とあるが、盗人のどのような行為が理解できなかったというのか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えよ。

ア 盗人があるじにあっさり捕まったため、盗んだ物を返したこと。

イ 盗人が灰を食べた後、盗んだ物を元に戻して帰ろうとしたこと。

ウ 盗人が盗みに入ったにもかかわらず、それほど物をとらずに帰っていきこうとしたこと。

エ 盗人が盗みを働いただけでなく、起きていたあるじをうち殺そうとまで思っていたこと。

問二 ——線部2「かかる心」とはどのような心か。本文中より五文字以内で探し、抜き出して答えよ。

問三 ——線部3「元のごとくに置いて候ふなり」とあるが、なぜ盗人はそうしたのか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えよ。

ア 自分の悪い心を消すためには、灰を食べるしかないと感じていたから。

イ 飢えにまかせて灰までも食べてしまった自分のあさましさを反省したから。

ウ 盗みを働く経験がしたかっただけで、物が欲しかったわけではなかったから。

エ 食べ物でなくても腹を満たせば、物を盗む気持ちにはならないと感じていたから。

問四 ——線部4「家あるじのあはれみ」とは「家あるじ」のどのような行動について言っているのか。説明せよ。

